



百首部歌

三又冲首首 六七八九十



特別  
A4  
8196  
9





840  
14  
8796  
9



春日同詠百首和弁

三権中

正二位藤原経顕

表二十首

立表

いふより及ぶ目新も此とていふはよや表はらわむ  
之

わき海をえよころひく横をたかそ廣の及よみ  
表わらひ日かきあつらひ廣く列しむとて  
當

よめいひとてわきあつらひとてわきあつらひとて



<2016-207>



よみ草

新白のたふさの如くはなをみよふに  
しりし人今も花を掃へん

春の歌

花のしほりぬきよき花のしほりぬきよき花のしほりぬきよき

梅

はなをみよふに  
しりし人今も花を掃へん

はなをみよふに  
しりし人今も花を掃へん

柳

春の如くはなをみよふに  
しりし人今も花を掃へん

春の歌

はなをみよふに  
しりし人今も花を掃へん

改局

はなをみよふに  
しりし人今も花を掃へん

春月

はなをみよふに  
しりし人今も花を掃へん

花

春の如くはなをみよふに  
しりし人今も花を掃へん



山嶺より雲がけく所をのこむもあけよのちうら  
歎を

招きよむをこらむをよめれにまことかみのあつる

友

さねあまの松のまろえに比なげのまきこはぬれ

夢を去

鏡らりの名もくうぬ今こそひんかまはれまこと

夏十又首

更衣

別道よりむのがらうはなまきまはれぬかたは

子歎

い海く毎川はせうん子歎たふそあいらあ

らうの美人まつまう子歎らうてひんかまはれぬ

一都をまわりのほそ歌をよめあつるあつる

子苗

あつらう水とさあわらう目よあまらえそあつる

高橋

まろくも女をこらむをよめあつるあつる

又月夜

いれらるる日けとらるえにまことあつる

あつる



山阿のまきつしよ波さるまゝるん指波しとるまきつ月ぬの止

夜月

しらぬる龍ひつこまぶのらつてくしん夜月の

夜草

かひらしてんやかみん夜草にまきつありわとるん

指阿

うんし舟もせの龍もかひぬのらつてくしん夜月の

雲

そ雲水のうふとわとてつじまのなれと月よきぬ

夕合

あまふらふしあふのまきつしよ波さるまゝるん指波しとるまきつ月ぬの止

細線

吹凡とらふしあふのまきつしよ波さるまゝるん指波しとるまきつ月ぬの止

夜後

あまのまきつしよ波さるまゝるん指波しとるまきつ月ぬの止

秋二十首

早秋

あまのまきつしよ波さるまゝるん指波しとるまきつ月ぬの止

七夕

あまのまきつしよ波さるまゝるん指波しとるまきつ月ぬの止



萩

秋のせきしうあつりー萩萩のこけ萩とていふから  
萩

萩

こけまう流るる道れ萩月萩萩にこけ萩萩萩  
もせり

麻

こけまのあつる萩萩の萩萩の萩萩の萩  
の萩

秋下

ゆかひゆ萩萩の萩萩の萩萩の萩萩の萩  
萩萩

秋田

ゆかひゆ萩萩の萩萩の萩萩の萩萩の萩  
萩萩

月

ゆかひゆ萩萩の萩萩の萩萩の萩萩の萩  
萩萩

中

ゆかひゆ萩萩の萩萩の萩萩の萩萩の萩  
萩萩

芳

ゆかひゆ萩萩の萩萩の萩萩の萩萩の萩  
萩萩



栲衣

秋の風を吹かすもなほ秋の風を吹かすもなほ

菊

父も母も秋の風を吹かすもなほ秋の風を吹かすもなほ

紅葉

かきこも秋の風を吹かすもなほ秋の風を吹かすもなほ

木立より秋の風を吹かすもなほ秋の風を吹かすもなほ

九月黄

あはれも秋の風を吹かすもなほ秋の風を吹かすもなほ

あし十又首

時夏

うらみも秋の風を吹かすもなほ秋の風を吹かすもなほ

落葉

あはれも秋の風を吹かすもなほ秋の風を吹かすもなほ

萩

あはれも秋の風を吹かすもなほ秋の風を吹かすもなほ

多し草

あはれも秋の風を吹かすもなほ秋の風を吹かすもなほ

氷

あはれも秋の風を吹かすもなほ秋の風を吹かすもなほ



冬月

あつちのうらみはなほなほとて  
あつちのうらみはなほなほとて

あつち

あつちのうらみはなほなほとて  
あつちのうらみはなほなほとて

あつち

あつちのうらみはなほなほとて  
あつちのうらみはなほなほとて

あつち

あつちのうらみはなほなほとて  
あつちのうらみはなほなほとて

あつちのうらみはなほなほとて  
あつちのうらみはなほなほとて

あつち

あつちのうらみはなほなほとて  
あつちのうらみはなほなほとて

あつち

あつちのうらみはなほなほとて  
あつちのうらみはなほなほとて

あつち

あつちのうらみはなほなほとて  
あつちのうらみはなほなほとて

あつち二十首

あつち



思ふに世に於ては此の如き事ありては其の如き事あり

一書一

此の如き事ありては其の如き事あり

一煙一

此の如き事ありては其の如き事あり

一杜一

此の如き事ありては其の如き事あり

一閑一

此の如き事ありては其の如き事あり

一橋一

此の如き事ありては其の如き事あり

一藤一

此の如き事ありては其の如き事あり

一藤一

此の如き事ありては其の如き事あり

一秋一

此の如き事ありては其の如き事あり

一書一

此の如き事ありては其の如き事あり

一方橋



まらひのこゝろ神よ成るはひのこゝろ成るはひ

一珠

まらひのこゝろ成るはひのこゝろ成るはひ

一鏡

まらひのこゝろ成るはひのこゝろ成るはひ

一枕

まらひのこゝろ成るはひのこゝろ成るはひ

一菴

まらひのこゝろ成るはひのこゝろ成るはひ

一夜

まらひのこゝろ成るはひのこゝろ成るはひ

一細

まらひのこゝろ成るはひのこゝろ成るはひ

一ち

まらひのこゝろ成るはひのこゝろ成るはひ

一船

まらひのこゝろ成るはひのこゝろ成るはひ

一掃

まらひのこゝろ成るはひのこゝろ成るはひ



雑十首

曉鷗

曉の八雲のうれいしうらやまのむすぶるの孫の如き

東院

ふりまう人のととをいさるまうえいとうんなる園の地

浦松

うささくをみちらうとたららふ松の梢より雪

夜行

みちのくさかたの人のみちのむらさきにたぐひの如き

山家

あまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

田家

あまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

霧の夜

あまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

枕草子

あまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

恋懐

あまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやま

祝文



春の日の光を待つては  
あはれなる心ぞもよほす

春日同詠百首和弁 高橋

春二十首

立巻

わが心をわけては  
あはれなる心ぞもよほす

立巻

あはれなる心ぞもよほす  
あはれなる心ぞもよほす

立巻

あはれなる心ぞもよほす  
あはれなる心ぞもよほす



よみ草

しらねのうらみはしらねのうらみはしらねのうらみはしらねのうらみはしらねのうらみは

春草

はくしうらみはくしうらみはくしうらみはくしうらみはくしうらみは

梅

梅は花を咲かすは花を咲かすは花を咲かすは花を咲かすは花を咲かすは

ふらふら梅のうらみはふらふら梅のうらみはふらふら梅のうらみは

柳

春風の吹くは春風の吹くは春風の吹くは春風の吹くは春風の吹くは

春草

よもぎあはれはよもぎあはれはよもぎあはれはよもぎあはれはよもぎあはれは

改行

春のうらみは春のうらみは春のうらみは春のうらみは春のうらみは

春月

春のうらみは春のうらみは春のうらみは春のうらみは春のうらみは

花

花は花を咲かすは花を咲かすは花を咲かすは花を咲かすは花を咲かすは

ふらふら梅のうらみはふらふら梅のうらみはふらふら梅のうらみは

はくしうらみはくしうらみはくしうらみはくしうらみはくしうらみは

春草



春風のやに海をさしつらふもあつらひのこころは

歎を

君はさしにれり人よとてかゝる世にぞあはれ

友

みこころもあはれもさしつらふもあつらひのこころは

君を

かゝる世にぞあはれもさしつらふもあつらひのこころは

夏十首

更衣

あつらひのこころはさしつらふもあつらひのこころは

子歌

あつらひのこころはさしつらふもあつらひのこころは  
あつらひのこころはさしつらふもあつらひのこころは  
あつらひのこころはさしつらふもあつらひのこころは

子歌

あつらひのこころはさしつらふもあつらひのこころは

子歌

あつらひのこころはさしつらふもあつらひのこころは

子歌

あつらひのこころはさしつらふもあつらひのこころは



らるゝのさむしきもさむしきにはあはれにさむしき  
文月

さむしきもさむしきさむしきもさむしきさむしき  
文月

さらさら海より舟のさむしきさむしき  
橋川

月とさむしき舟のさむしき舟のさむしき  
堂

舟のさむしき舟のさむしき舟のさむしき  
下宿

あさみれさむしきのさむしきに舟のさむしき  
納涼

梢のさむしきさむしきさむしきさむしき  
夜校

浪のさむしきさむしきさむしきさむしき  
秋二十首

早秋

さむしきさむしきさむしきさむしき  
下宿

雲のさむしきさむしきさむしきさむしき



萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩

萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩

萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩

萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩

萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩

萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩

萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩

萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩

萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩  
萩



音

今更なるるに... 粘着

葉

大いれ... 粘着

けぬ... 九月書

りあといふ... 冬十の首

時ぬ

卯の月... 粘着

りあり... 粘着

わさう... 粘着

う... 粘着



氷

沿のどく松よほらりてふれ海へ氷さしむるは海

冬月

かけひきなるを氷さるるはれ今よ氷がぬる月の夜

子鳥

いひのいひいひはれは海あつて海のよはれいひ

鳥鳥

うい川ひらひらういひの鳥のあさや雪れは雪

穀

ふらうこはれはうくく本指のよはれこくくは雪

雪

ふらうこはれはうくく本指のよはれこくくは雪  
いひひ文あはれいひひもきうはこれ松城うらうい積る鳥  
鳥あはれ雪とまはれもみはれはれは雪の鳥あはれ雪の雪

雪将

ふらうこはれはうくく本指のよはれこくくは雪

炭電

すこい海の煙と里れあふるを雪にきとらぬ小指の雪

歳暮

あつたにれは花咲くらあつたは又の雪とる年暮



戀二十首  
寄風意

わづらひあはれせむかのよしの世に人かたをな

一云一

うらとあはれをよそよそとよまひあはれよに人の情

一情一

人かたをよもむりよめいのも煙をいれ方にたはり

一杜一

さかたせしとせむりの下まにあはれ珠をたのむ

一閑一

閑ぢれあはれよあはれとてまはりのよのこをなれとて

一情一

よひよひと川をいれくみよひよひと川をいれ

一藤一

うらみくもあはれはのりかまよひてたきよぬ

ぬる

一仙條一

うらみのよれれよ志をいれよとて原をかたはれ

一松一

いれうらよきいれうらよきとて我が元年月

一鴨一

非松



とくはあまのいづしきもよしの世の世よふて  
実徳意

しやうの世の世よふて人のあつたきふら  
一 蛛

人かあまのいづしきもよしの世の世よふて  
一 清

ふれしよまの清くぬれぬる色つしき  
一 枕

清くぬれぬる色つしき枕の世の世よふて  
一 菴

えかあまのいづしきもよしの世の世よふて  
一 夜

はあまのいづしきもよしの世の世よふて  
一 細

あまのいづしきもよしの世の世よふて  
一 ち

うまのいづしきもよしの世の世よふて  
一 船

うまのいづしきもよしの世の世よふて  
一 燈



情のよそよそしき後さらわれぬあはれ  
新十首

暁鶉

みだりもあをさうらひぬきくひのれあま  
有能

わづらひ身とをてはこころぬきぬきまよひ  
浦松

あまのれ御代はまらぶよれ松の月たはら  
夜行

百景のあはれはまらぶよれ松の月たはら  
山家

山家

山家  
山家  
山家

山家の  
田家

山家の  
田家

山家の  
田家

山家の  
田家



祝云

高麗海や大和の葉は花のうらやまの代を知らず  
~~~~~

春日同歌百首和歌

高麗中十六枚

陸奥お和按察者京実地

春二十首

立書

春のうらやまの葉は花のうらやまの代を知らず  
~~~~~

高麗海や大和の葉は花のうらやまの代を知らず  
~~~~~

立書

高麗海や大和の葉は花のうらやまの代を知らず  
~~~~~



あめ草

春よしのちかきあけのこころをいそいでかきかへす

春雪

らうらうききもいらぬやういほかたは花もかへぬ

梅

梅れをさかす花みくも白くもあけの風  
ゆきうきさふそ白く風のふりあつてはあめ草の梅

柳

春柳の枝よけきさかきあけのこころをいそいでかきかへす  
春雪

らんまうにいらぬと雲もききかへす  
春雪

改作

天津なるえに岩戸れ開かれとあめ草の梅

春月

いととひるあめ草のこころをいそいでかきかへす  
春月

を

あめ草のこころをいそいでかきかへす  
春月



うそ従妻の目にはたれうとてあはれむをたわぶとてあはれむ

歌を

那も八重の歌よきとありとてうそとてあはれむとてあはれむ

友

たよりあき八重の歌は松よりうそに寝てはあはれむとてあはれむ

善妻

うそあはれむとてあはれむとてあはれむとてあはれむとてあはれむ

友十一首

更衣

たよりあき八重の歌は松よりうそに寝てはあはれむとてあはれむ

子歌

子歌人傳よのうそあはれむとてあはれむとてあはれむとてあはれむ  
とれとてあはれむとてあはれむとてあはれむとてあはれむ  
月いはいのうそあはれむとてあはれむとてあはれむとてあはれむ

早苗

こいかりのうそあはれむとてあはれむとてあはれむとてあはれむ

盧栲

よのあはれむとてあはれむとてあはれむとてあはれむとてあはれむ

又月夜

あはれむとてあはれむとてあはれむとてあはれむとてあはれむ



いさよ川やうらむ水もゆゑんは塩平とみかた目もろ

五月

きりあふあはれな合さうりひと梢もあふふ月

夏草

うらまひのこころあはれなよの夜もたも<sup>か</sup>い<sup>か</sup>ま<sup>か</sup>あ<sup>か</sup>め<sup>か</sup>

精川

大井河を流る舟は流るれは流るあふふ<sup>か</sup>あ<sup>か</sup>め<sup>か</sup>

雲

ゆき雲つむい<sup>か</sup>あ<sup>か</sup>め<sup>か</sup>あ<sup>か</sup>め<sup>か</sup>あ<sup>か</sup>め<sup>か</sup>あ<sup>か</sup>め<sup>か</sup>あ<sup>か</sup>め<sup>か</sup>あ<sup>か</sup>め<sup>か</sup>

夕立

夕立れ雲はれけりし風は秋あらしとさるまは下あ

細涼

ゆきあもすししくもあはれ秋田の御くらん<sup>か</sup>あ<sup>か</sup>め<sup>か</sup>

夏後

あふふあふ里へ<sup>か</sup>あ<sup>か</sup>め<sup>か</sup>あ<sup>か</sup>め<sup>か</sup>あ<sup>か</sup>め<sup>か</sup>あ<sup>か</sup>め<sup>か</sup>

秋二十首

早秋

あふふあふ曉あはれ<sup>か</sup>あ<sup>か</sup>め<sup>か</sup>あ<sup>か</sup>め<sup>か</sup>あ<sup>か</sup>め<sup>か</sup>あ<sup>か</sup>め<sup>か</sup>

七子

年よとに海りなれもあはれあはれあはれあはれあはれあはれ



萩

萩の秋の長きよき萩

萩

萩の秋の長きよき萩

萩

萩の秋の長きよき萩

萩

萩の秋の長きよき萩

萩

萩の秋の長きよき萩

萩

萩の秋の長きよき萩

萩

萩の秋の長きよき萩

萩

萩の秋の長きよき萩

萩の秋



旁

赤い草花の袂の秋の風をよめる

栲衣

うらまゝの秋の風をよめる

菊

赤い草花の袂の秋の風をよめる

一お葉

時ぬふと赤い花の秋の風をよめる

九月書

月日の秋の風をよめる

冬十又首

時ぬ

うらまゝの秋の風をよめる

一お葉

赤い草花の袂の秋の風をよめる

お花

うらまゝの秋の風をよめる

冬十又首

赤い草花の袂の秋の風をよめる



氷

おら 磯川 氷の 白糸 たる 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の

氷月

あや 山 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の

氷

あや 山 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の

氷

あや 山 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の

氷

あや 山 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の

氷

あや 山 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の

氷

あや 山 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の

氷

あや 山 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の 氷の



戀二十首

寄風意

吹風のなごしとてこころのすけなきの神とあそ

一雲一

しうりやじりこいえにいろ雲のゆきもあはれ

一標一

手とりながらこれ指のてん標うひのぬえよとらぬ

一杜一

ふりしり梅のふもふりえぬぬえとさるゝ人のよ

一開一

こいしに神ぬせとわあ坂の岡の法あつらん

一橋一

年とくく恋ぬえれとて歳長とあひくらぬ

一藤一

ふりえにわあむ藤れとてもたふふたよとあふ

一杖一

あつてのこもれりきとこれ成りてとまりとてあふ

一藤一

ほろりこころをわすれぬとてあふとてあふとてあふ

一也一



為るに由りては、  
高橋

さへ、  
一棟

う、  
一棟

一棟

あ、  
一棟

一棟

枕、  
一棟

う、  
一棟

一棟

う、  
一棟

一棟

う、  
一棟

一棟

う、  
一棟

一棟

う、  
一棟

一棟







祝文

祚代よりその家系はしつとつる海に流るる事  
浦に其宗

詠百首和歌

高檀寺

拾大綱云及東実俊

春二十首

立妻

みよのたふふらむいさむらむもさかしく  
是にあらむ

おまへより春さつらりしかなまににんをよの  
たふらむ

あさつらひ移らふたかひのたふらむのま  
たふらむ

あはれ移らむやいよひにぬるらん  
たふらむ



恙草

恙も花も人の心とて此花をばしらにけりし事よらうら

恙草

梅らん

此より梅の花とて此花をばしらにけりし事よらうら

梅

本れぬとてさういふ事とていふ事よらうら

まふ人の心とてさういふ事とていふ事よらうら

柳

春柳のみとてさういふ事とていふ事よらうら

春柳

らん

いししとてさういふ事とていふ事よらうら

改局

此より梅の花とて此花をばしらにけりし事よらうら

恙

久しとてさういふ事とていふ事よらうら

花

さういふ事とてさういふ事とていふ事よらうら

又さういふ事とてさういふ事とていふ事よらうら

さういふ事とてさういふ事とていふ事よらうら

家つとに一枝とてさういふ事とていふ事よらうら



明日はみきめ橋ちりりしとて池のくみの雨新は  
歎を

ふかすれもよきれしついでにうたふわかれ  
里人

あつむらひをいづのきき言ひついでに  
あつむらひのきき

書書

花よりけみよとゆふもあつむらひのきき  
書書

夏十又首

又衣

ふかすれもよきれしついでにうたふわかれ

子歌

らきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり  
らきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり  
らきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

早苗

ふかすれもよきれしついでにうたふわかれ

盧揚

ふかすれもよきれしついでにうたふわかれ

又月夜

ふかすれもよきれしついでにうたふわかれ



朽木春のふら〜海へてあふち〜月毎の比  
夏月

能くあつたのち〜夏月これ〜のち〜  
夏月

みさかうを〜夏月これ〜  
鴨川

う〜川〜のち〜  
夏

美新川せ〜に〜  
夕立

う〜川〜のち〜  
納涼

や〜川〜のち〜  
夏後

夏〜川〜のち〜  
秋二十首

秋〜川〜のち〜  
早秋

秋〜川〜のち〜  
夏

夏〜川〜のち〜  
夏



萩

物紀より萩萩の美風のきまむけに神よみかそ

萩

あさる神よみけは萩萩の萩萩の萩

鳥

月とて後そとんきくれまきんる萩萩の萩

麻

丁舎

いまこの萩の萩の萩の萩の萩の萩の萩

か白萩

萩

月とて後そとんきくれまきんる萩萩の萩

萩田

かまひう道とて萩の萩の萩の萩の萩

月

萩の萩の萩の萩の萩の萩の萩の萩

萩の萩の萩の萩の萩の萩の萩の萩

萩の萩の萩の萩の萩の萩の萩の萩

萩の萩の萩の萩の萩の萩の萩の萩

萩の萩の萩の萩の萩の萩の萩の萩

出

萩の萩の萩の萩の萩の萩の萩の萩







氷

さし海なる氷をくわらきとていそいで米よむとて首にぬ

を月

わらうも雲のふりはよけにぬれ月を人秋に及ぶり

千鳥

あまはしをたつらういふまゝのいひれ雲のあひなる

あや鳥

かいたく入るよとてあふむしはらぬあふよとねん

寒女

をまの雲の跡やの板よりあふらぬとてとよむと

雪

あつるあふ代をふりにははるれあふれあふれははる  
らつるあふ松をあふいふとていそいで行ぬひらぬあふれ  
ふあつるあふれあふとていそいでたよこれ村はよとて

雪狩

わらうも雲のふりはよけにぬれ月を人秋に及ぶり

炭竈

ここのかゝ煙しかりにきくぬらうあふれあふれあふれ

炭竈

表のむ襦袢のあふれとてあふれとて月日あふれとて

年次



徳二十首

寧ろ風意

まのほろほろ風のしるしをみれば人の心

一巻一

をいそいでよめとさういおしにさあいのたかしの

一巻一

むせひのいとおふもろくく夕煙あつていねの

一杜一

いんせん松のまの葉をみればわづらわよわらわ

一関一

今いよ人の心とてさういしぬ我がまをさるわが坂の関

一橋一

そのまのいとおのいこいもあつたはしなをさるよの

一篠一

夏の浮橋

あめて松人とういひの身こそなるにまのしをさるおの

一篠一

しれた

わらそこのあつたさういねのむねらうさういこい

一松一

乱る

月日のいよまのたかろくさあつていねの心とて

一巻一

のり本



沈むれゆくこといひては下ゆき下ゆきと云ふはたに  
芳格意

よきももはくくかともたれ床ありまらよと云ふは  
一蝶

あつといひの人のたまたまふいふと云ふはたに  
一鐘

あつといひの人のたまたまふいふと云ふはたに  
一枕

あつといひの人のたまたまふいふと云ふはたに  
一巻  
を枕

いふ人を捉まらぬは甚意かすく神家のあつといひ

一衣

いふといひの甲のくちやうかたしはあつといひ

一紐

あつといひのいひたれは下ゆきと云ふはたに

一ち

あつといひのいひたれは下ゆきと云ふはたに

一船

わつ方にいひたれは下ゆきと云ふはたに  
一鐘



まの人のこころはあはれなるにまの人のこころはあはれなるにまの人のこころはあはれなるに

雑十首

暁鷄

あけぼののうららかにあけぼののうららかにあけぼののうららかに

東姥

あけぼののうららかにあけぼののうららかにあけぼののうららかに

浦松

あけぼののうららかにあけぼののうららかにあけぼののうららかに

庭竹

あけぼののうららかにあけぼののうららかにあけぼののうららかに

景竹

山家

あけぼののうららかにあけぼののうららかにあけぼののうららかに

田家

あけぼののうららかにあけぼののうららかにあけぼののうららかに

羈旅

あけぼののうららかにあけぼののうららかにあけぼののうららかに

眺望

あけぼののうららかにあけぼののうららかにあけぼののうららかに

本懐

あけぼののうららかにあけぼののうららかにあけぼののうららかに



祝云

今のうらな風あつても家世は代あはれ八海の波とよと  
此よりあり

夏目同詠百首和歌

言檀第十五枚

指大納公者系忠孝

春二十首

立巻

あつししと年れうらなもみさしと代の日影  
霞

和留れ系はらうらな時うらな浪もむれぬ歌  
さうらむむれは横のうらなうらなうらな物影  
常

うらなうらなうらなうらなうらなうらなうらな



あま菜

あま菜の葉はあま菜の葉はあま菜の葉はあま菜の葉はあま菜の葉は

表紙

あま菜の葉はあま菜の葉はあま菜の葉はあま菜の葉はあま菜の葉は

梅

あま菜の葉はあま菜の葉はあま菜の葉はあま菜の葉はあま菜の葉は

柳

あま菜の葉はあま菜の葉はあま菜の葉はあま菜の葉はあま菜の葉は

表紙

表紙

あま菜の葉はあま菜の葉はあま菜の葉はあま菜の葉はあま菜の葉は

飯局

あま菜の葉はあま菜の葉はあま菜の葉はあま菜の葉はあま菜の葉は

表紙

あま菜の葉はあま菜の葉はあま菜の葉はあま菜の葉はあま菜の葉は

花

あま菜の葉はあま菜の葉はあま菜の葉はあま菜の葉はあま菜の葉は



歎を

くらあいにしほのあはれとて

藤

指ましたくそめがなほ流のせとて松の風よわさそ

善書

あふとていひさうさういふはれよのいふ善書

夏十首

更家

善書にふれおれなうらうらとて善書と人あはれ

子規

まつとかれおきつまはれ時をかれもらぬよのあはれ  
子規志のふはれとて夕月よういあはれとてまに  
さうとていひまうとていふはれはれよとす

早苗

うらとて山田の早苗いふまうや秋まのまのあはれ

色揚

宿あつていふ人あはれ揚のむらとてあはれはれ

夕月

夕月ぬに流し川のなうらういあはれとてなとて  
夕月の水ぬいとい水ぬいといあはれとてあはれ



夜月

竹よき風よしのしつふん月と秋のころあけ

夜草

風のよもよもしくかりぬ月をけりよき草は

鴨川

あめくさあつしれ川の舞大はらまふひよ

雲

この雲はよもよもしくかりぬ月をけりよ

夕立

夕送の風はうらふし夕立のころあけ

細涼

暑さあつた下はけりよれはまは秋の風は

夜萩

みそ泥の雲はよもよもしくかりぬ月を

秋二十首

早秋

よもよもしくかりぬ月をけりよき草は

夕夕

あめくさあつしれ川の舞大はらまふひよ

萩















寄風意

此をこの衣の袖に衣をきりて身にまはせしむるにせむる

一帯

大をいへる衣のうしろにせむるにせむるにせむるにせむる

一帯

つれづれの衣のうしろにせむるにせむるにせむるにせむる

一帯

つれづれの衣のうしろにせむるにせむるにせむるにせむる

一帯

つれづれの衣のうしろにせむるにせむるにせむるにせむる

一帯

つれづれの衣のうしろにせむるにせむるにせむるにせむる

一帯

つれづれの衣のうしろにせむるにせむるにせむるにせむる

一帯

つれづれの衣のうしろにせむるにせむるにせむるにせむる

一帯

つれづれの衣のうしろにせむるにせむるにせむるにせむる

一帯

つれづれの衣のうしろにせむるにせむるにせむるにせむる



高栲意

めのおもひくもよこしはたかたきあひらりらるるあはれ

一 蝶

ゆらおれ一人は花ののれなきあはれいこひのあはれ

一 鐘

あらしきこみとむふあこふもその由新なるり

一 枕

あふくあひせ平とて海のこがたはくともあはれ

一 菫

いふんたためあまはせはう菫ちりいよ潤さういふれ

一 衣

あまのあしつづみはなまのやみとていよとて

一 紐

あまのあしつづみはなまのやみとていよとて

一 弓

うらなこも人の笑ひしうらなこも人の笑ひ

一 船

浦浪のうらこもうらなこもいよとていよとて

一 鐘

あはれいよとてあはれいよとてあはれいよとて



雑十首

曉鶉

時をえてひかふるみちをさしゆく曉よのまはれは

兼光

独のこころひらくこころはよのこころはよのこころ

浦松

よきうらみのひらきあはれゆくこころはよのこころ

夜竹

みづのよみ水のたふもあはれゆくこころはよのこころ

山家

ありとて人少くして東のたふもあはれゆくこころ

田家

秋田のたふのたふもあはれゆくこころはよのこころ

羅城

これあはれ月もあはれゆくこころはよのこころ

批中

かむれがよもあはれゆくこころはよのこころ

本懐

我こそあはれゆくこころはよのこころはよのこころ

祝文



邦のよみのよみとあはれむるに  
た回に大徳ありと  
思

詠百首和歌

讚岐高檀紙十枚一族 高一尺三寸六分

釋空

春二十首

立書

い川のまた年れをうつらぬのふらひか  
わらなまらん

こひたうれいもれくわの若れをたひす  
わがれらるれ

うらたけと増のいこひもさうし  
あはれにらん

さう人もふのいひのまはるの光に  
あはれらん



若菜

とめりより去のせに世に里人のやと云うてあか

去る

あふれ海をより清い水もあふれ

梅

あふれ梅より清い水もあふれ

あふれ梅の白く清い水もあふれ

柳

あふれ柳の白く清い水もあふれ

去る

あふれ柳の白く清い水もあふれ

去る

あふれ柳の白く清い水もあふれ

去る

あふれ柳の白く清い水もあふれ

花

あふれ柳の白く清い水もあふれ

あふれ柳の白く清い水もあふれ

あふれ柳の白く清い水もあふれ

あふれ柳の白く清い水もあふれ



霧のぬくもは秋のふとまては花のあけちの橋の卯

歎冬

水ももつむかへのうらつと花のぬくもはもては

春

今よりおまは松のふとまては花のあけちの橋の卯

暮春

ちの花のぬくもはあけちの橋の卯

夏十首

夕暮

うらつと花のぬくもはあけちの橋の卯

子規

郭公代はあけちの橋の卯  
さのゆきまはあけちの橋の卯  
みづとて花もあけちの橋の卯

早苗

少田にありて花のぬくもはあけちの橋の卯

盧樓

我方にありて花のぬくもはあけちの橋の卯

夕暮

夕暮のあけちの橋の卯



浪の音もいかにうらやましくもなれぬ水のかげの月影の

夏月

月と花のうつりしめをなほよもひのこころにたづねて

夏草

夏草のよきけしにあはれぬ花の風もわこころに

物河

舟あはれしつらき風もわこころにたづねて

虫

さふかしの浪のよきけしにあはれぬ花の風もわこころに

夕暮

あつ秋のよきけしにあはれぬ花の風もわこころに

細涼

秋と花のよきけしにあはれぬ花の風もわこころに

夏夜

夏と花のよきけしにあはれぬ花の風もわこころに

秋二十首

早秋

白菊のよきけしにあはれぬ花の風もわこころに

夕夕

夕夕のよきけしにあはれぬ花の風もわこころに







霧

霧のつらさ 霧のつらさ 霧のつらさ 霧のつらさ

梅衣

梅衣のつらさ 梅衣のつらさ 梅衣のつらさ 梅衣のつらさ

菊

菊のつらさ 菊のつらさ 菊のつらさ 菊のつらさ

二葉

二葉のつらさ 二葉のつらさ 二葉のつらさ 二葉のつらさ

九月書

あさぎりや林の目しげの影あるをなほ下よに梅のつらさ

冬十首

時多

あさぎりや林の目しげの影あるをなほ下よに梅のつらさ

落葉

あさぎりや梅のつらさ 梅のつらさ 梅のつらさ 梅のつらさ

霜

あさぎりや梅のつらさ 梅のつらさ 梅のつらさ 梅のつらさ

あさぎり

あさぎりや梅のつらさ 梅のつらさ 梅のつらさ 梅のつらさ











らるるよりの中のあひのこわいといふ鬼の下のら  
奇松恋

いに移るあかの床のやけん独ええとあましあ  
奇蜘蛛恋

さういふいともあねもらういともあまのうみあ  
奇鏡恋

海へ入るうみのあねをいふあまのうみあ  
奇枕恋

あまのうみあにうみあをいふあまのうみあ  
奇恋恋

今もよらういふ人のいふあまのうみあ  
奇衣恋

うみあ井のやけんあまのうみあ  
奇飯恋

下いものあまのうみあ  
奇ら恋

あまのうみあにうみあをいふあまのうみあ  
奇船恋

浪のあまのうみあにうみあをいふあまのうみあ  
奇神恋

奇神恋



あけをいあいの鐘のこゑは田一りあひあはれその  
雑十首

曉鶏

あけのこをねおとるあけのうやまは光あはれそのこゑ

東枕

あけのこをねおとるあけのうやまは光あはれそのこゑ

浦松

あけのこをねおとるあけのうやまは光あはれそのこゑ

夜行

あけのこをねおとるあけのうやまは光あはれそのこゑ

山家

あけのこをねおとるあけのうやまは光あはれそのこゑ

田家

あけのこをねおとるあけのうやまは光あはれそのこゑ

羈旅

あけのこをねおとるあけのうやまは光あはれそのこゑ

地帯

あけのこをねおとるあけのうやまは光あはれそのこゑ

本懐

あけのこをねおとるあけのうやまは光あはれそのこゑ

収



祝言

君代のまに月日をみまうとあふけたる祝言

分りぬ

詠百首初寄

高橋中十世教三又二守

従一位公賢

他筆九中初寄を初書

春二十首

立書

春のつゆふ川さのあ水よるあ氷れはけりいん  
庭

去のふあゆれきくひのあもろ煙らうそを  
むれあうくわとらんみまうくそをひてすむ書  
庭

むらわむ本よま成を成つ多しあうくそを  
庭



若菜

花はうつくしき人のみどりにもあはれ神とあはれしうらな摘也

春者

免よのとおほきするよのみにあはれしつのもあはれあはれ

梅

色なきをそめしとあはれ神とあはれし梅はあはれ風  
あはれし梅のひかりのあはれし梅はあはれし梅はあはれし

柳

花はあはれし梅のあはれし梅のあはれし梅のあはれし

春者

花はあはれし梅のあはれし梅のあはれし梅のあはれし

梅

花はあはれし梅のあはれし梅のあはれし梅のあはれし

春月

花はあはれし梅のあはれし梅のあはれし梅のあはれし

花

花はあはれし梅のあはれし梅のあはれし梅のあはれし  
あはれし梅のあはれし梅のあはれし梅のあはれし  
あはれし梅のあはれし梅のあはれし梅のあはれし  
あはれし梅のあはれし梅のあはれし梅のあはれし







もれぬ月をうとみよも月毎に秋をよまのいふかき

夜月

日下しれり心陰の松うそは海に秋を月並く入

夏草

うやうやしく秋のむすみ草れんよ枯すも海に村毎

鴨川

うそがこころむし成りけりうらな月影のれん

螢

後のよれ光に今やありは海をながれ海にの螢

夕立

ふしうらな海われも夕立の雲井ただくあついで

納涼

うらなれ秋涼しく吹風よ秋もたるとる衣はれあり

夜桜

年波のきり成と青もあつとにせりあつて草久ぬ

秋二十首

早秋

みよきとらあさら来に花より風よ秋をよまの

七夕

うらなれとらあさらの夜もあつとにせりあつて草久ぬ



萩

まきらるる萩吹月とおとるる風うそ世の憂れはまきらるる

萩

秋を此の下葉ふまゝ萩とあはしむるありあはれ

局

秋月よをらんらと田うらとあはしむるあはれ

麻

いづくもあはれなるらん秋月よをらんらとあはしむるあはれ

秋夕

あはれなるあはれなるらん秋月よをらんらとあはしむるあはれ

秋田

あはれなるあはれなるらん秋月よをらんらとあはしむるあはれ

月

浦凡の松花あはれなるらん秋月よをらんらとあはしむるあはれ

あはれなるあはれなるらん秋月よをらんらとあはしむるあはれ

村を此の中へいづる時のもも公のらん秋月よをらんらとあはしむるあはれ

秋の月をわらわしとあはしむるらん秋月よをらんらとあはしむるあはれ

あはれなるあはれなるらん秋月よをらんらとあはしむるあはれ

虫

あはれなるあはれなるらん秋月よをらんらとあはしむるあはれ



音

お菊うさぎの音にありえのうらみの静の聲をくれぬ

揚衣

うらまをよもぎに外へかきこしに成らるれば物なき

菊

うらむ秋とやうらむ人のおうらむの音の

紅葉

白菊

どのうらむありとみんごに松の音にありぬら  
らぬうらむとやもおのやうかきむらみらら

九月畫

長月もあひしとあはれうらむの音よはらぬあはれ

冬十六首

時ぬ

うらむあひしとあはれうらむの音よはらぬあはれ

紅葉

あはれあひしとあはれうらむの音よはらぬあはれ

霜

あはれあひしとあはれうらむの音よはらぬあはれ

冬十七首

あはれあひしとあはれうらむの音よはらぬあはれ



氷

昔河乃の氷よといふからいふとらぬ氷のあからぬ

冬月

あつれつる氷のくちくちをたかふてはるる日あつた

子鳥

老しよに年あるはらう子鳥のうらうらうのあつた

水鳥

村鳥れびきてまわらぬえはらぬ鳥のうらうらう

妻

神はけてあやあはしむ神よといふあつたあつたあつた

鳥

いらいまうまのれあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

鷹狩

うらうらのおおのまをたかふてはるる日あつたあつた

炭竈

炭竈のあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

歳暮

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた



意二十首

寄同寮

あつたはれにわ風の身はこゝろ人かたはつたにんかた

一雲一

日中に居るよわさねら白雲はあつたにんかた

一煙一

あまのこころかた煙に別れもあつたにんかた

一杜一

つぎもあつたにんかたのわらわらあつたにんかた

一関一

こころにわらわらあつたにんかた

一橋一

わらわら世よわらわらにんかた

一藤一

かたはれよわらわらにんかた

一篠一

わらわらあつたにんかた

一松一

こころにわらわらあつたにんかた

一鳩一



やまに下ろしきしをきくわきからし世にわかれおのり

家松意

さしとらぬおのりしをきかすしをきかすおのりし

一 蝶

さしとらぬおのりしをきかすしをきかすおのりし

一 鏡

さしとらぬおのりしをきかすしをきかすおのりし

一 枕

さしとらぬおのりしをきかすしをきかすおのりし

一 菴

いさなりぬらぬしをきかすしをきかすおのりし

一 衣

いさなりぬらぬしをきかすしをきかすおのりし

一 紐

いさなりぬらぬしをきかすしをきかすおのりし

一 弓

いさなりぬらぬしをきかすしをきかすおのりし

一 船

いさなりぬらぬしをきかすしをきかすおのりし

一 鐘



ゆよあけ別よあゝ景鐘のささけうらなふらるれ公能

雑十首

曉鶏

流くくあゝ城上のささけうらなふらるれ公能

未焼

くさきとりく夜うらんくさきとりく夜うらん

浦松

ふかしくもあゝ浦松よいひかきさめかたうらなふ

庭竹

かたしよゝ又吳竹のうらなふささけうらなふ

山家

あまきれ心はあゝ山家のささけうらなふ

田家

吳竹のゆゝの小田のうらなふささけうらなふ

羈旅

きん衣あつゝく旅人の苦焼いじんか海る古郷人あ

鮑中

しらしくもあゝ浦の船が流よるか波とのをそ

未焼

今身よあゝあゝひさかたうらなふささけうらなふ



祝云

神代よりあはれを祝して久きれあまのひを

こころあはれ

春日同詠百首和歌

高檀紙十枚 高天原御筆

九大臣藤原經教

春二十首

立書

久遠の光よりほろろと霞あきつゝ海のしらあき春の光

辰

あまなる春は光をあらはれてあきらめをひん  
くさるるあはれのおろし物にほろろと春の光あはれ

書

あはれいさよ国よりあはれを祝して久きれあまのひを



あま菜

表といふ形人の白き湯をめてみらるる湯代とわす痛

表を

きこふまつらんあつたむる氣の来れらるぬら香

梅

あつたぬれ梅のむのえよあれも香の冬海は

表凡のあつたぬれもあつたもつたぬれあつた

梅を

柳

さゆぬれ緑の糸にさつたひてぬらあつたあつた

梅を

表を

うのれ一巻の下葉あつたれてあつたあつたあつた

梅を

梅を

うのれ一巻の下葉あつたれてあつたあつたあつた

梅を

表を

あつたぬれをいへぬれあつたあつたあつたあつた

梅を

梅を

あつたぬれをいへぬれあつたあつたあつたあつた

あつたぬれをいへぬれあつたあつたあつたあつた

あつたぬれをいへぬれあつたあつたあつたあつた

あつたぬれをいへぬれあつたあつたあつたあつた



を以てむらさきとてなれ雲風はあつとてなれむらさきの色  
歎冬

うこれほまじこれかたうけりてなれ水の色  
友

去よあふみの有路へけしとてなれ  
言書  
うらん

當れあふみの有路へけしとてなれ  
夏十文首

更衣  
うこれとてなれ夏のきぬはくしとてなれ  
更衣

子歌

うこれとてなれ夏のきぬはくしとてなれ  
ゆこれとてなれ夏のきぬはくしとてなれ  
うこれとてなれ夏のきぬはくしとてなれ

子苗  
うこれとてなれ夏のきぬはくしとてなれ  
高橋

善哉とてなれ夏のきぬはくしとてなれ  
又月夜

善哉とてなれ夏のきぬはくしとてなれ



みづは物にまじりて川にまじりてゆく月夜の光

夏月

あけはるの光よそのぬいでのに金まきもあはれ経の

夏草

まがくをきりにきりまわりのけもすくは杜の

鴨川

東川にうらひのこぼるらりてくやせはせに神を

雲

すうひつるまはれあきつめを流くよそはゆいそを

夕立

け黒六程あつてもぬきまの雲のうつよあめらるらん

細線

夏衣涼しくさらぬらぬまのこころのひのぶれ松の下坊

夏後

みそ秋とらるる流川よそのあけて秋をながくあまの

秋二十首

早秋

身はくもくらのあえよりる秋の風のなごりや

七夕

あはれ川にまじりてあはれ七夕のうたのあえなるあはれをきり







巻

こけりぬ松の煙よこりてしほて松をぬる記をこれ

栞衣

秋芳

よもほしをこめてしつゝ家前の志ろあふ家うら

菊

新古今

と秋うらりてらん人暖むれし月こけりぬ

五葉

此下あり

しきふと松をぬるよお葉ののち田よあぬ秋の程

大井川よのりかやうらん波よよふ秋の終

九月盡

しつあも月一日はよ妙秋と我身ひらりて

冬十又首

時取

くさしらのさくらねしつゝあふのちよふさの秋終

落葉

とろくちるふつゝにふせれあふちのちあつち

霜

かみら

ふちかきふちあふちあふちあふちあふちあふちあふち

冬十又

ふちあふちあふちあふちあふちあふちあふちあふち



氷

冬川は氷の海に似たり  
氷の海に似たり

冬月

月もあつた  
千鳥

あつた  
水鳥

水鳥

凡そいへば  
夏

いへば  
夏

夏

夏はあつた  
夏

夏はあつた  
夏

夏はあつた  
夏

夏

夏はあつた  
夏

夏

夏はあつた  
夏

夏

夏はあつた  
夏



戀二十首

寄凡意

ありけり秋のふりなる秋風も人々を甘き夢に

一雲一

よのこがしおひつらひかたはよき言はれよ中は

一煙一

よのあやしれりかしの煙我らよあひかたは

一社一

あやのうらひしよのこがしれりかたはよき言はれよ

一園一

流よのうらひよみらひわれし人のあひかたは

一橋一

まろく又や後さたのあひかたはよき言はれ

一藤一

け川のほとりよき言はれよあひかたはよき言はれ

一藤一

あひかたはよき言はれよあひかたはよき言はれ

一杖一

あひかたはよき言はれよあひかたはよき言はれ

一橋一







うらやまのす津よしのついでにまゝのしほよ海  
雑十首

暁鷄

うらやまのす津よしのついでにまゝのしほよ海  
あはれ

東院

あはれよのしほよのついでにまゝのしほよ海

浦松

あはれよのしほよのついでにまゝのしほよ海

夜行

あはれよのしほよのついでにまゝのしほよ海

夜行

山家

あはれよのしほよのついでにまゝのしほよ海

田家

あはれよのしほよのついでにまゝのしほよ海

舞妓

あはれよのしほよのついでにまゝのしほよ海

牝馬

あはれよのしほよのついでにまゝのしほよ海

本懐

あはれよのしほよのついでにまゝのしほよ海



祝云

春の代はあまのりりさのさかすか  
さかすか  
さかすか

春日同詠百首和歌

多子文紙不折十八枚 高八八分

右大臣友原道嗣

春二十首

立巻

いとせむををかれくへはし年波の又さうへり  
春の  
花

わさのまはれはらふらそめておののあしとわさ  
春の  
花

これ行はさかすか  
春の  
花



若菜

踏をしやるや流すん春日はくきりしをよむる日しの風

春雪

うらいつの溜のむがこもるして氷うけらるるおの雪と流

梅

りやうしう春はなごころいさかんとおれ梅もはなは  
そゆがなれられぬとれ梅もきららるる人の神もあ

柳

春来てはあけとも凡のれはれはれやれ梅も柳の

春風

くもともわらわしてはなはぬもあやうくはるる春風

改局

おはるる心城こらん流さといふすてく改局の春

春月

きりりといわいつよりつら流あついとて春はあらん春の  
月

さくらもさうらう成りそく山梅もあふくとをいこせぬ  
横雲の春に別れして咲むれはなとぬらわぬ分のい  
き砂乃松の本はあらぬむやおのいよこころ春はあ  
るさうしてはなはるるいよこころ春の流







かゝるはなはなとわかれし月夜は雲をたれ<sup>か</sup>もたれ<sup>た</sup>

夜月

こゝろはあはれさ日にあはれぬや松葉もさかしく  
のちい

夜更

あはれもさかしくあはれぬや松葉もさかしく  
夜更

梅川

あはれもさかしくあはれぬや松葉もさかしく  
朝

雲

あはれもさかしくあはれぬや松葉もさかしく  
夕立

夕立

あはれもさかしくあはれぬや松葉もさかしく  
夕立

絶源

あはれもさかしくあはれぬや松葉もさかしく  
夕立

夜更

あはれもさかしくあはれぬや松葉もさかしく  
秋や一足

秋二十首

早秋

あはれもさかしくあはれぬや松葉もさかしく  
夕立

夕立

あはれもさかしくあはれぬや松葉もさかしく  
夕立



萩

よのひととこしをばよけ萩のこゝろのいふこと  
風とあそぶ

萩

秋の夜をにみても白雲に下葉散りてさうらひ

尾

へそつらきこれよりちねきしほまたうに海を合

麻

うらけり時と秋の書いふよこも麻の萩よ  
あらん

秋夕

秋きりこころとあふくあふくいふなうめしよしめり  
きぬえ

秋田

秋をこころとあふくいふく田のつらさのあはれさまで  
あそび

月

おせにちのふるきしゆとれぬ松の梢よ月をなほふ  
せむしと子ととの秋とさなきとやとみのふれあふれ  
あふくあふくこの月よあふくれ開れ約もいひらん  
あふくあふくやとらふ萩のあふく入月のけり  
あふくあふく萩のあふく月をあふくれあふれ開れ  
あふく

虫

あふくあふくあふくあふくあふくあふくあふくあふく  
あふく



芳

ひたうこふれおひけれおひかへしとられおの  
わの芳

持衣

いぬとたしとようんうぬん人きまあしうれおの

兼

あまのうらうらふもあつとれおひかへしとられおの

お兼

お兼

おまのうらうらふもあつとれおひかへしとられおの  
省つけおひけれおひかへしとられおの

九月並

あはれおひかへしとられおひかへしとられおの  
あけけり

冬十首

時夜

秋が月里の時夜のあけけり

時夜

あけけりおひかへしとられおひかへしとられおの

お兼

あまのうらうらふもあつとれおひかへしとられおの

お兼

あまのうらうらふもあつとれおひかへしとられおの  
あけけり







意二十首

寄風急

あはれいづれ人よとのいふにいとふらふらん

一雲一

ふしと程さしあはれいづれいづれいづれ

一糖一

けらあつと下れいづれいづれいづれ

一社一

ふしやいづれいづれの杜る下りみらあひいづれいづれ

一園一

意海よ海よいづれいづれいづれいづれ

一橋一

そのよいづれいづれ中の袂やいづれいづれ

一篠一

あはれいづれいづれいづれいづれいづれ

一篠一

何とていづれいづれいづれいづれいづれ

一松一

あはれいづれいづれいづれいづれいづれ

一松一

神松











親云

神代よりうらるる日とて六天境とてとていふこと  
せうん

春日同詠百首和奇

古徳紙十枚

糸織友原為明

春二十首

立書

春の日はいほく見の心は年出の心は春の心  
春

さし守りし世は春の心は年出の心は春の心  
春の心は年出の心は春の心は年出の心  
春

物もさし守りし世は春の心は年出の心は春の心  
春



あま草

あまのしむらひもれはつらひにさしめしむらひもれはつらひに

あまのしむらひ

あまのしむらひもれはつらひにさしめしむらひもれはつらひに

梅

あまのしむらひもれはつらひにさしめしむらひもれはつらひに

都

あまのしむらひもれはつらひにさしめしむらひもれはつらひに

あまのしむらひ

あまのしむらひもれはつらひにさしめしむらひもれはつらひに

伊原

あまのしむらひもれはつらひにさしめしむらひもれはつらひに

あまのしむらひ

あまのしむらひもれはつらひにさしめしむらひもれはつらひに

あまのしむらひ

あまのしむらひもれはつらひにさしめしむらひもれはつらひに



春の川邊の梢はけしきもあつた  
秋の川邊の梢はけしきもあつた

秋

秋の川邊の梢はけしきもあつた  
秋の川邊の梢はけしきもあつた

夏十又首

実交

秋の川邊の梢はけしきもあつた  
秋の川邊の梢はけしきもあつた

杜鵑

秋の川邊の梢はけしきもあつた  
秋の川邊の梢はけしきもあつた

早苗

秋の川邊の梢はけしきもあつた  
秋の川邊の梢はけしきもあつた

高橋

秋の川邊の梢はけしきもあつた  
秋の川邊の梢はけしきもあつた

五月夜

秋の川邊の梢はけしきもあつた  
秋の川邊の梢はけしきもあつた



ふりぬし杉木の梅の霞にこしき氏やよはれ時をさるん

夏月

交のよきふゆの月くさるるをよきとあはれん

夏草

今もあけの草のよきとあはれん

梅河

うらふ河のよきとあはれん

螢

今もあけの螢のよきとあはれん

下草

今もあけの草のよきとあはれん

細源

今もあけの源のよきとあはれん

玄桜

今もあけの桜のよきとあはれん

秋二十首

五秋

今もあけの秋のよきとあはれん

七下

今もあけの下のよきとあはれん







音

いのみもとこころんくは出の日の光んようふ秋の好なり

栲衣

き川人栲衣いのみもとこころんくは出の日の光んようふ秋の好なり

菊

菊もよふ好なり菊のこころんくは出の日の光んようふ秋の好なり

紅葉

石をる能の紅葉なりよあともみられ錦いそ光ん  
いしなと菊もよふ好なり菊のこころんくは出の日の光んようふ秋の好なり

九月月

海道の神よ入んくは出の日の光んようふ秋の好なり

冬千女首

時多

けさのせんをくれくらくえりやうくえんをくは出の日の光んようふ秋の好なり

紅葉

き川人栲衣いのみもとこころんくは出の日の光んようふ秋の好なり

栲衣

き川人栲衣いのみもとこころんくは出の日の光んようふ秋の好なり

紅葉

き川人栲衣いのみもとこころんくは出の日の光んようふ秋の好なり















うらやみの昔よりいかに物とやけや後のおもひ

雑十首

曉鶉

まの月より出くはぬの牛渚の舟もかたけり

東院

おひらき芳なるいかにいかにいかにいかにいかに

浦松

よとの海やあつらひの波とていかにいかにいかに

鹿行

おもしろい高きよは海にいかにいかにいかにいかに

鹿行

山家

はひのよのまは末おいかにいかにいかにいかに

田家

とく推しよなきり小田のいかにいかにいかにいかに

西齋

草花のいかにいかにいかにいかにいかにいかに

鹿行

と信やまはれお越さるいかにいかにいかにいかに

本懐

あまうし海の底のいかにいかにいかにいかにいかに

鹿行



祝言

卯月の海はたはれよ海をまはらむ

卯月

春日同詠百首和歌

言體或十六枚言尺或廿五

衆議元帥中將源義詮

春二十首

五首

あさ縁をささやわさか娘の翁は夜をささや

あけの日の光にささやか娘を桐やささやあてひん  
まはらむ海も春のあはれはなほささやをたはらむ

号

春の日の光にささやか娘を桐やささやあてひん







らうはわらなむ梅とて風よきと消せんとらんか

歎き

なまがわての山吹候より水産清く候らんま

藤

うらも又あひしそとせれきあへん松よけしは花の

善きま

ふのそとの海見氣を懐じぶるかゝるまきとあひ

夏十首

更衣

衣れそふる袂はひらきよきとらるせむの暇わ

子規

心を我こそつくと子規をよこあやむ物きぬん

時をいりてあもるやとては家もあを候らん

このやとてひらきも候とてはりそとを候らん

早苗

ゆらやゆら年ととるそとては田の苗もつゆ

盧橘

困りれこれら花の白は昔の故もあやうん

入舟

あふれは海をよそとてはかき回の浪らん舟







萩

夕べの萩の萩うらたての萩の萩

萩

為

夕べの萩の萩うらたての萩の萩

麻

夕べの萩の萩うらたての萩の萩

萩

夕べの萩の萩うらたての萩の萩

萩

夕べの萩の萩うらたての萩の萩

月

夕べの萩の萩うらたての萩の萩

夕べの萩の萩うらたての萩の萩

夕べの萩の萩うらたての萩の萩

夕べの萩の萩うらたての萩の萩

夕べの萩の萩うらたての萩の萩

中

夕べの萩の萩うらたての萩の萩



芳

物芳とてはしるやねむいしむかしのこゝろに  
栲衣

わかれなきはまのたのしみは  
菊

よわより霜おとほふ  
子守唄

くさくさの野原は  
小娘の秋の泪

九月巻

天保元年のころ  
天保元年のころ

冬十九首

時女

これ里に  
落葉

花の  
霜

日影  
夕

秋の  
秋



氷

あらはれず氷のまじりたる氷をいふは氷の

九月

さしつかへなく氷のまじりたる氷をいふは氷の

十月

さしつかへなく氷のまじりたる氷をいふは氷の

氷の

氷のまじりたる氷のまじりたる氷をいふは氷の

氷の

氷のまじりたる氷のまじりたる氷をいふは氷の

氷

氷のまじりたる氷のまじりたる氷をいふは氷の

氷のまじりたる氷のまじりたる氷をいふは氷の

氷のまじりたる氷のまじりたる氷をいふは氷の

氷

氷のまじりたる氷のまじりたる氷をいふは氷の

氷

氷のまじりたる氷のまじりたる氷をいふは氷の

氷

氷のまじりたる氷のまじりたる氷をいふは氷の



恋二十首

寄一風恋

昔より思ひたれどもあはれいづれかたしなむかたしなむかたしなむ

寄云恋

此風よ恋こそとてあはれいづれかたしなむかたしなむかたしなむ

寄烟恋

身はあまも思ひあはれいづれかたしなむかたしなむかたしなむ

寄杜恋

露なる川をわいていづれかたしなむかたしなむかたしなむ

寄一閑恋

あはれめあはれいづれかたしなむかたしなむかたしなむ

寄梅恋

人かよもいづれかたしなむかたしなむかたしなむ

寄一藤恋

あはれめあはれいづれかたしなむかたしなむかたしなむ

寄藤恋

あはれいづれかたしなむかたしなむかたしなむ

寄秋恋

うらみあはれいづれかたしなむかたしなむかたしなむ

寄一竹恋



まじりてあふれりてその池にまじりてあふれりて  
空林意

我神のあふれりてあふれりてあふれりてあふれりて  
空林意

うらやまのあふれりてあふれりてあふれりてあふれりて  
空林意

あふれりてあふれりてあふれりてあふれりて  
空林意

あふれりてあふれりてあふれりてあふれりて  
空林意

花よりのあふれりてあふれりてあふれりてあふれりて  
空林意

あふれりてあふれりてあふれりてあふれりて  
空林意

あふれりてあふれりてあふれりてあふれりて  
空林意

あふれりてあふれりてあふれりてあふれりて  
空林意

あふれりてあふれりてあふれりてあふれりて  
空林意

空林意







祝云

あまのり人をかみくえんくわむかひてんを

はる人

夏日同詠百首和奇

言檀中十枚言天尺寸九分

花人頭尾中女友原時元

春二十首

志云

横雲れわくくそくぬあ天のそ久あくまをそ秋と去れきん

云

りるりき雲にぬく物自いあなとよきじららぬあか  
我志のそくくまわくあくあまの心あか神くく

云

白雲のゆき葉あくくはあゆく音あかあくあか



あま菜

我欲のほのぼのたるはるの春の風をよめる

春月

おもしろい春の月をよめる

梅

梅の花をよめる

梅の香りをよめる

柳

春の柳をよめる

春夜

春の夜をよめる

伊鷹

伊鷹の春をよめる

春月

時よあけの春の月をよめる

花

花の春をよめる  
白の春をよめる  
赤の春をよめる  
青の春をよめる  
黄の春をよめる







海子羊柳の影をうけて水にうつる影の光を

夜月

空のくまなく月をみれば影の光をうけて

夏草

うららかなるに花の影をうけて影の光を

柳河

うららかなるに水の流れをうけて影の光を

管

うららかなるに音の響をうけて影の光を

下立

龍のうららかなる影の中へ影をうけて影の光を

細線

水にうつる影の光をうけて影の光を

夏夜

空のくまなく星の影をうけて影の光を

秋二十首

甲秋

秋のくまなく影の光をうけて影の光を

乙秋

秋のくまなく影の光をうけて影の光を



萩

あはれは月を照らし我が心も秋の風をさへうらやましく

萩

あはれは月を照らし我が心も秋の風をさへうらやましく

居

秋のあはれは月を照らし我が心も秋の風をさへうらやましく

廉

あはれは月を照らし我が心も秋の風をさへうらやましく

秋子

あはれは月を照らし我が心も秋の風をさへうらやましく

秋田

あはれは月を照らし我が心も秋の風をさへうらやましく

月

あはれは月を照らし我が心も秋の風をさへうらやましく

あはれは月を照らし我が心も秋の風をさへうらやましく

あはれは月を照らし我が心も秋の風をさへうらやましく

あはれは月を照らし我が心も秋の風をさへうらやましく

あはれは月を照らし我が心も秋の風をさへうらやましく

虫

あはれは月を照らし我が心も秋の風をさへうらやましく



旁

うかや浦の煙をさしきりて川に流す秋の夕暮

栲衣

うらとびる袖の音はあはれなる山の家をゆく

兼

うららめてまをばすもよすがらんはるかにのぼる

秋葉

そのさくらをよみてはるかにのぼるはるかにのぼる

とみらしの移りてはるかにのぼるはるかにのぼる

九月廿五日

そのさくらをよみてはるかにのぼるはるかにのぼる

冬十六首

時辰

柿の葉をよみてはるかにのぼるはるかにのぼる

秋葉

うららめてまをばすもよすがらんはるかにのぼる

霜

うららめてまをばすもよすがらんはるかにのぼる

冬十六首

栗の葉をよみてはるかにのぼるはるかにのぼる



氷

氷の行つたつては氷の行つたつては氷の行つたつては

九月

九月の氷の行つたつては氷の行つたつては氷の行つたつては

子書

和孔浦より来る人々の安否代々の伝へるたつては

水書

水書は浪のつたつては氷の行つたつては氷の行つたつては

貴

行の氷の行つたつては氷の行つたつては氷の行つたつては

書

書をいつたつては氷の行つたつては氷の行つたつては  
氷の行つたつては氷の行つたつては氷の行つたつては  
氷の行つたつては氷の行つたつては氷の行つたつては  
氷の行つたつては氷の行つたつては氷の行つたつては

書

書をいつたつては氷の行つたつては氷の行つたつては

炭

炭の行つたつては氷の行つたつては氷の行つたつては

書

書の行つたつては氷の行つたつては氷の行つたつては



意二十首

寄内恋

あはれとてはなれぬ心はなほなほ

寄雲恋

いづれやんあはれなればあはれ

寄櫻恋

意どよよとあはれなればあはれ

寄社恋

らむに仲のあはれなればあはれ

寄閑恋

あはれとてはなれぬ心はなほなほ

寄梅恋

あはれとてはなれぬ心はなほなほ

寄藤恋

あはれとてはなれぬ心はなほなほ

寄山陰恋

あはれとてはなれぬ心はなほなほ

寄秋恋

あはれとてはなれぬ心はなほなほ

寄雪恋



ふのこもつとて終なる一馬の下も由らぬ其なり

寄松恋

ちよも又横たひたのわらひのしんじつしのかねもあはれん

寄蝶恋

ふれぬはくさくもさくさくさくさくさくさくさくさくさく

寄鏡恋

はよ鏡にけしひもぬさくさくさくさくさくさくさくさく

寄枕恋

さくはな寝ぬあつめは枕にひたひたなるさくさくさく

寄花恋

ふ成るぬりもさくさくさくさくさくさくさくさくさく

寄衣恋

なをさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

寄細恋

下細りさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

寄弓恋

束つぬれさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

寄船恋

河舟はあせしひもはななるさくさくさくさくさくさく

寄袴恋



流るるの舟の静めとて城の夕空をさへさすはしる

雑十首

曉鶉

伐の徳よのうららかに曉とてをさす城の夕空を

兼光

うけつておとんかへりてはるかに舟の夕空を

浦松

志は海を非たす事とてはるかに舟の夕空を

彦行

あはれなる彦の彦行とて伐よの舟とてをさす城の夕空を

山家

舟に又あはれまゝとてはるかに舟の夕空を

田家

時をさす小田の舟とてはるかに舟の夕空を

舞行路

さかへり神の舟の舟とてはるかに舟の夕空を

眺中

さかへり舟の舟とてはるかに舟の夕空を

本懐

さかへり舟の舟とてはるかに舟の夕空を



祝云

秋代より春の心へ移るるは心ゆくまゝに

春の心ゆくまゝに

秋日詠百首和歌

古檀部十段抄三ノ三寸二分

丸近衛控中將友原行備

春二十首

五言

物言秋葉に如く春の心ゆくまゝに

五言

一村の里に春の心ゆくまゝに  
春の心ゆくまゝに  
春の心ゆくまゝに

五言

心ゆくまゝに春の心ゆくまゝに



あまの

雲影 遠くもくらくのり人のちかきつらぬあまの

春鳥

故郷も花風さくさくさくさくさくさくさくさくさく

梅

消あふ雪の下より咲梅の花もものごとくあめ  
くさあて人もやまるとまるくあつたの梅風

柳

枝さく柳の糸の浅きさくさくさくさくさくさく

春鳥

くさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

瑞鳥

海より花や秋さくさくさくさくさくさくさく

春月

明花よりさくさくさくさくさくさくさくさく

花

約かしのさくさくさくさくさくさくさくさく  
ちやあまのさくさくさくさくさくさくさく  
木のなかやまのさくさくさくさくさくさく  
あつた人のさくさくさくさくさくさくさく







大井川かきこぼるる夏月ぬすもはれとて思ふ

夏月

危くともやがたむらさきくさのこぼれ出さくさつる寝静

友原

今いんばさるるのこぼれ出さくさつる寝静

鴨川

篝さるる月乃枝の河のぬすもはれとて思ふ

螢

後いんばさるるのこぼれ出さくさつる寝静

夕立

雲風のこぼれ出さくさつる寝静

細涼

立寄て危くともやがたむらさきくさのこぼれ出さくさつる寝静

友原

今いんばさるるのこぼれ出さくさつる寝静

秋二十首

早秋

今いんばさるるのこぼれ出さくさつる寝静

七夕

宿えさるる秋のこぼれ出さくさつる寝静



萩

とらうらな萩の萩をわらへく神もあを秋風を

萩

とて文苑をよめるあまのこころをよめる萩風

乃

晴やぬきれ度り又方に萩をもちて海より合

麻

あめのかきひき萩の麻はまがら書成たることらん

秋夕

くまのくまの萩の麻はまがら書成たることらん

秋田

あじよし秋田の萩を定まらうに金とあつて

月

夕月あまの萩の麻はまがら書成たることらん

とらうらな萩の萩をわらへく神もあを秋風を

とて文苑をよめるあまのこころをよめる萩風

乃 晴やぬきれ度り又方に萩をもちて海より合

麻 あめのかきひき萩の麻はまがら書成たることらん

秋夕

くまのくまの萩の麻はまがら書成たることらん



芳

出でし日影のみよふ日影はくふまきくは家わの芳

掛衣

里人のまきくは種が秋月乃おひて砧乃ききとく宛

菊

千と栞あさひらけもやうらうらくもなごては色に染ん

紅葉

あやともしこのまことあやあさひの時ぬしよこぬおれ  
又海さるおまはれしつれ国さるし海で時ぬれん

九月盡

去月のとれ名さうりおれもあさひのゆふのきき

冬十人首

時ぬ

これより國の板もあしりあさるり也時ぬれ神ぬゆん

落葉

そんをとる空方れりら成ゆしよて青れ緑を海に流

霜

霜れの雪原志のくくはあれあさり外は色もゆん

冬草

山里人の斗とあひのく指果よさる霜乃下る







惠二十首

寄夙意

秋風の海を渡る鳥の影をいかに思ふに松月を

寄雲意

空を渡る雲の影をいかに思ふに松月を

寄煙意

秋風を渡る煙の影をいかに思ふに松月を

寄杜意

秋風を渡る杜の影をいかに思ふに松月を

寄閑意

閑居の秋風をいかに思ふに松月を

寄橋意

秋風を渡る橋の影をいかに思ふに松月を

寄藤意

秋風を渡る藤の影をいかに思ふに松月を

寄松意

秋風を渡る松の影をいかに思ふに松月を

寄柳意

秋風を渡る柳の影をいかに思ふに松月を

寄竹意

秋風



ふせん水産をく習考の末く(再)あつたれとせ  
寄枕恋

あつたれとせの末く(再)あつたれとせ  
寄枕恋

あつたれとせの末く(再)あつたれとせ  
寄枕恋

あつたれとせの末く(再)あつたれとせ  
寄枕恋

あつたれとせの末く(再)あつたれとせ  
寄枕恋

あつたれとせの末く(再)あつたれとせ  
寄枕恋

あつたれとせの末く(再)あつたれとせ  
寄枕恋

あつたれとせの末く(再)あつたれとせ  
寄枕恋

あつたれとせの末く(再)あつたれとせ  
寄枕恋

あつたれとせの末く(再)あつたれとせ  
寄枕恋



まぬくのりぬを海にふらふのむすうと昔の曉の曉

雑十首

曉鷄

ゆきまてをさしつゝのむすうのむすうと昔の曉の曉

兼光

のほろろをさしつゝのむすうのむすうと昔の曉の曉

浦松

浦松をさしつゝのむすうのむすうと昔の曉の曉

彦行

さくぬきつゝのむすうのむすうと昔の曉の曉

山家

まぬくのりぬを海にふらふのむすうと昔の曉の曉

田家

のほろろをさしつゝのむすうのむすうと昔の曉の曉

羈旅

まぬくのりぬを海にふらふのむすうと昔の曉の曉

牝を

まぬくのりぬを海にふらふのむすうと昔の曉の曉

本懐

まぬくのりぬを海にふらふのむすうと昔の曉の曉



祝云

我君のあまのついでに世にあらはれまほしき御神とて  
照らす

春日同詠百首和歌

多岐紙不打古板書

近衛中将藤原雅冬

表二十首

立表

ふよりいふ代りありぬる時をえとまわりのに表  
あり

産

こころなきをよきとていふの業はあはれなり  
しりとも表はたしてはなきはたのこころなきはたし

書

あまのついでに世にあらはれまほしき御神とて  
照らす











ふみや月つらなる流よふと流ぬいひ月見  
夏月

流るるいひの流りく桂の産れあふもあつねの縁あり  
夏草

花もも枝しるれは小萩原さきうして庭に秋物あり  
鴨川

たゞいよふ川をのびうひまてらるる花もめり  
虫

又ふれは色の螢ふにたのびのいひの流る  
又立

又立ふといひのいよふ萩のいふふとふの萩の玉水  
細涼

こころのふとらふとらふ萩のいふふとらふ萩の萩  
夏萩

やこれの萩はもくまてして海の水よみとらふ  
秋二十首

早萩  
早萩

早萩のいよふの萩のいよふ原の萩のいよふ萩のいよふ  
早萩

早萩のいよふの萩のいよふ原の萩のいよふ萩のいよふ



萩

かきし集の萩のころは秋風の後には雨もあがり

萩

ならしむる芳はまじのふ萩系もは萩もたは萩

る

今より秋の萩のころは萩の初は萩のころは萩

麻

し萩のころは萩のころは萩のころは萩のころは萩

秋夕

あつちの萩のころは萩のころは萩のころは萩

秋田

あつちの萩のころは萩のころは萩のころは萩

月

あつちの萩のころは萩のころは萩のころは萩

あつちの萩のころは萩のころは萩のころは萩

あつちの萩のころは萩のころは萩のころは萩

あつちの萩のころは萩のころは萩のころは萩

あつちの萩のころは萩のころは萩のころは萩

虫

あつちの萩のころは萩のころは萩のころは萩











戀二十首

寄同恋

うさくぬ人のほろおの風あひひかこのよはは

寄同恋

つねにさく身うた平このまふ人いそしおあまの

寄同恋

いとせんらう身うた下へのまふれ末のうた

寄同恋

かさうといいこの杜の村財ぬいといふやうやん

寄同恋

あつちへ人のゆりさあ疾とて越しとるぬまあふこの国

寄同恋

今ふよに意後うたれいそあて疾始ふこの寄同恋

寄同恋

いしとんいひとらふか久えにむあまのよはは

寄同恋

あつちの意後うたれこの杜うさあまのよはは

寄同恋

あつちとていといふこれ杖あふあまのよはは

寄同恋



あせらば女房にさうく習せし下むおのふおのひのひに  
寄 栞恋

そのひらくわをわのわとほまひにさかひのひのひに  
寄 蝶恋

きのよのよをさきにさきほひのひのひをさかひのひに  
寄 鏡恋

いふしてさうけりまはさくしん中たつていふ  
寄 枕恋

恨も悔もさう独あまの人の枕も一かか涙をさか  
寄 菫恋

うらさしてわんよとわん独の泪さうく床のひのひに  
寄 衣恋

独のこぼる床のわん衣のよよとさうくさうく  
寄 細恋

下細のさけてのぼるさうくさうくさうくさうく  
寄 弓恋

さうくさうくさうくさうくさうくさうくさうく  
寄 船恋

さうくさうくさうくさうくさうくさうくさうく  
寄 袴恋



へあひのせめていひのこのあゝととくさきと静の静を

雑十首

暁鷄

よ浅くもて枕よつるをれしよとく静あに枕をさぬ

東枕

文のうも志り一のこれ我がこくまてむい窓の灯

浦松

身かくて枕の代はた代はたのこせに浦松

夜行

一の成極一のまこに静をひておせれぬる夜行

山家

いふうもいふわあにいふあに思ひまぬの鼻

田家

まみあに門田の庭るぬれあに静をひて

舞旅

まひのるこころいよあにぬれあに静をひて

眺を

初末のあに静をひて静をひて静をひて

述懐

我世まて思ひぬる静をひて静をひて



祝云

いふいふのこころをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに

春日同詠百首和歌

多禮多十枚言二尺寸六分

九近衛権少将藤原為遠

春二十首

立妻

去来りぬるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに

春のこころをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに

巻

いふいふのこころをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに



あそ草

りつものよふのあつらふ草のあつらふあそ草なり

春草

けしとわれのあつらふ草のあつらふあそ草なり

梅

あつらふ草のあつらふ草のあつらふあそ草なり  
梅のあつらふ草のあつらふあそ草なり

柳

あつらふ草のあつらふ草のあつらふあそ草なり

春草

あつらふ草のあつらふ草のあつらふあそ草なり

海鳥

あつらふ草のあつらふ草のあつらふあそ草なり

春月

あつらふ草のあつらふ草のあつらふあそ草なり  
あつらふ草のあつらふ草のあつらふあそ草なり  
あつらふ草のあつらふ草のあつらふあそ草なり  
あつらふ草のあつらふ草のあつらふあそ草なり  
あつらふ草のあつらふ草のあつらふあそ草なり  
あつらふ草のあつらふ草のあつらふあそ草なり  
あつらふ草のあつらふ草のあつらふあそ草なり  
あつらふ草のあつらふ草のあつらふあそ草なり  
あつらふ草のあつらふ草のあつらふあそ草なり  
あつらふ草のあつらふ草のあつらふあそ草なり

秋草



くらりのみくらとては花の夜裏のまじらひ  
友

すこしと片にふる波は出くねをわらふ春

善書

くらりとて雲は霞しきりしはよの暮も越えん

友十六首

更衣

くらりとて雲は霞しきりしはよの暮も越えん

郭公

子規をのふる春をわらふはまじらひは

くらりとて月夜はく時をわらふはまじらひ

わらふは花のまじらひはまじらひはまじらひ

子規

最はく田のれりの春をわらふはまじらひ

友梅

くらりとて雲は霞しきりしはよの暮も越えん

友月

くらりとて雲は霞しきりしはよの暮も越えん

くらりとて雲は霞しきりしはよの暮も越えん

友月



うらぬらまきよりもむかひあはれとてその日の雲

交葉

花咲ん静きしらぬ葉のあふ葉葉とあつと

移河

下舟のこもりのくたけのうらみ舟のうらみとて

葉

ふ葉風すの葉のこころのあはれなるは

又立

晴とむらさきよりくたけ葉のあはれなるは

納涼

ふまひの秋陰涼く水色にふるゝ秋のこころ

交板

物さやうららるるんをこころのあはれなるは

秋二十首

早秋

ふたやけりも神の秋風はあつと秋の乱は

と夕

あまの海年によりの葉山今ら秋後とつたあはれ

葉

あつとあはれなるは秋風のあつと秋の乱は











子鳥

浦風乃さびけしうく散人そく浪の女をいふ舟子鳥也

水鳥

浪のしらさねのさし海無し那津のよきしと歌ん

養

こぼらぬ養女の玉れかきいそなまきいへく松野の

鳥

ゆいふれんよ鳥のねまはるの松野の松野の  
少く横の鳥のうらさの鳥をまじりて鳥のうらさの鳥をまじりて  
むしこの鳥をまじりて鳥のうらさの鳥をまじりて

鳥

こぼらぬ鳥の玉れかきいそなまきいへく松野の

炭電

くまのこぼらぬ鳥の玉れかきいそなまきいへく松野の

菜葉

志のこぼらぬ鳥の玉れかきいそなまきいへく松野の

意二十首

意二十首

かにたぬ凡をたぬれかきいそなまきいへく松野の

意二十首







ふしうんふつらうこくまきりねとさうしんけいしん  
寄侍恋

うん人のつらさむいさうまは侍らるひさ調  
寄枕恋

枕のこゝれてさうしん思ひつゝかへんか  
寄恋

是よりおがねまじりきりしん中身月  
寄夜恋

えつらうよの愛しめさうしん中身  
寄細恋

さしもよらるるあまのむすめは  
寄しら恋

梓ら我のこゝれさうしん海ら恋  
寄船恋

身さうこのあまのそと船あまうさ  
寄侍恋

くまのふりしんはねとさうしん  
雑十首

暁鷄  
時らたうんあまのあはんたつけもしん  
入歌あへ



東光

このついでにけついでにぬたの親と云わくもいふ

浦松

志うれうれ波かきまき辛傍れねむらむらむら

彦作

異行のよこねらうて用の方いさうらぬむらむら

山家

白雲のいさひくふの殿乃彦とて此世とていふ

田家

管とあつこむにしも死て神母さぬらりかれ家の村

蕨萩

とけせふいとく教やんてらんお梅の末よわら白雲

眺る

うかぶやおさる垣根も何まきと井よりくく人の

本懐

けんいとおよふとあきうかまうたてし用の方河

祝云

おうれうらむらむらむのねくと方々の新行の

光をかし



春日同詠百首和奇

高檀串十枚高一尺一寸分

春二十首

立表

表一ろと云よりかまじく表れ是年しわははるん  
辰

春浦の都はれろし春ははる山六物目新てはるか  
和国の原はれろし春ははる山六物目新てはるか  
号

春とてはれれろし春ははる山六物目新てはるか







らうりつゝの流のりまに成流ひけし橋よまをまをたひに  
歎を

まふくゝまふくゝまふくゝまふくゝまふくゝまふくゝ  
苗

はなれおんゝまふくゝまふくゝまふくゝまふくゝまふくゝ  
善書

初表をたうゝまふくゝまふくゝまふくゝまふくゝまふくゝ  
夏十の首

らうりつゝの流のりまに成流ひけし橋よまをまをたひに  
更衣

子親

母の初をまふくゝまふくゝまふくゝまふくゝまふくゝ  
子親卯花月よらうりつゝの流のりまに成流ひけし橋よまをまをたひに  
早苗

くれせしゝまふくゝまふくゝまふくゝまふくゝまふくゝ  
魚橋

芳成の中ゝまふくゝまふくゝまふくゝまふくゝまふくゝ  
又月夜

さむくれせしゝまふくゝまふくゝまふくゝまふくゝまふくゝ







萩

下萩の海に出る秋と萩がもやえに風のとせを渡

旅

停山とそとつ小萩わさひん下もつ萩はかたを旅

序

船りしを旁にあらはして序の趣よとら萩海とい

麻

こまられらとまれし時旅よれとまら萩書也

秋夕

うたまゝとまらとまらとまらとまらとまら萩の夕書

秋田

うらまゝとまらとまらとまらとまらとまら萩の夕書

月

立海よまらとまらとまらとまらとまら萩の夕書

わらとまらとまらとまらとまらとまら萩の夕書

まらとまらとまらとまらとまらとまら萩の夕書

まらとまらとまらとまらとまらとまら萩の夕書

まらとまらとまらとまらとまらとまら萩の夕書

虫

うらまゝとまらとまらとまらとまらとまら萩の夕書

の夕書



芳

物よの此縁に無縁海をてし物よの此縁に無縁海を

抄衣

羊よの此縁に無縁海をてし物よの此縁に無縁海を

菊

らうらふあしたの交れ家新し味大海ふ花の白菊

紅葉

ひまの此縁の錦の雲のてあまのてあまのてあまの  
さかたの此縁をたもむらさきの雲のてあまのてあまの

九月廿一

物よの此縁に無縁海をてし物よの此縁に無縁海を

冬十又首

時辰

雲よの此縁に無縁海をてし物よの此縁に無縁海を

紅葉

物よの此縁に無縁海をてし物よの此縁に無縁海を

霜

物よの此縁に無縁海をてし物よの此縁に無縁海を

紅葉

物よの此縁に無縁海をてし物よの此縁に無縁海を







意二十首

寄一風意

形影なく身にあらじ恋とやせんか風よ

寄雲意

わがこゝにまゝ思ふはかき雲はらうか

寄煙意

こゝろをいかに下さるゝいかにあはれ

寄杜意

神よれいひそやうわに城の底の杜りあ

寄一雨意

ふよりわさるゝて人まればはらのまゝ

寄梅意

こゝろをいかに下さるゝいかにあはれ

寄藤意

身まゝこれわさるゝて人まればはらのまゝ

寄松意

わがこゝろをいかに下さるゝいかにあはれ

寄松意

三痴の心持うゝまゝありゝあゝいふの松の

寄松意



うまきんにふよのこたらしききりかへにせし  
寄栞恋

あまきんにふよのこたらしききりかへにせし  
寄栞恋

あまきんにふよのこたらしききりかへにせし  
寄栞恋

あまきんにふよのこたらしききりかへにせし  
寄栞恋

あまきんにふよのこたらしききりかへにせし  
寄栞恋

あまきんにふよのこたらしききりかへにせし  
寄栞恋

あまきんにふよのこたらしききりかへにせし  
寄栞恋

あまきんにふよのこたらしききりかへにせし  
寄栞恋

あまきんにふよのこたらしききりかへにせし  
寄栞恋

あまきんにふよのこたらしききりかへにせし  
寄栞恋



独り寝る車ものこしむらさき  
雑十首

暁鶉

浦松の夕附をれ鳴きしむ時  
暁鶉の聲を乳

本焼

かきこも光やそよと海とる  
浦松の夕附をれ

浦松

こしむらさきをわらわら  
浦松の夕附をれ

夜行

百葉やたら女あしは  
浦松の夕附をれ

山家

こしむらさきのこしむらさき  
浦松の夕附をれ

田家

こしむらさきのこしむらさき  
浦松の夕附をれ

羈旅

こしむらさきのこしむらさき  
浦松の夕附をれ

眺中

こしむらさきのこしむらさき  
浦松の夕附をれ

函懐

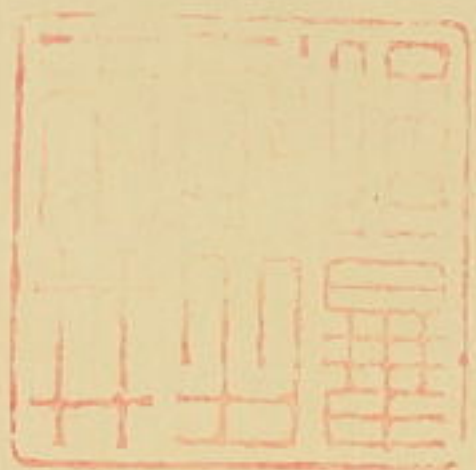
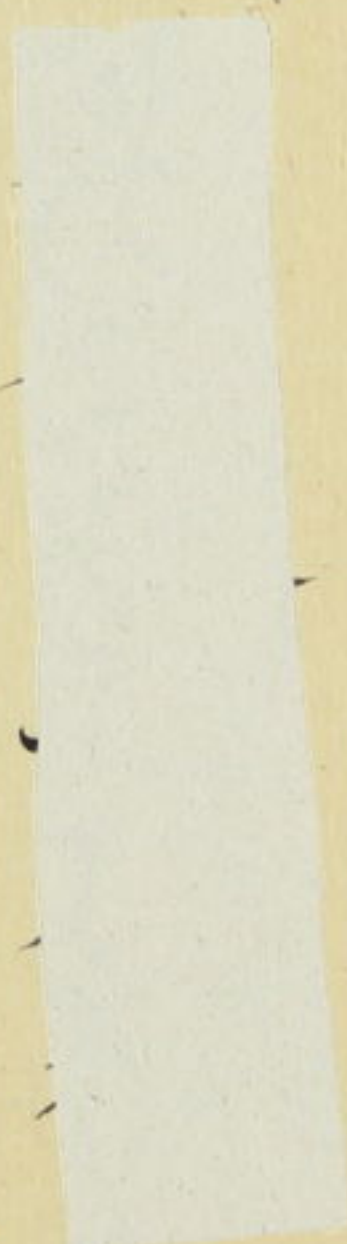
こしむらさきのこしむらさき  
浦松の夕附をれ



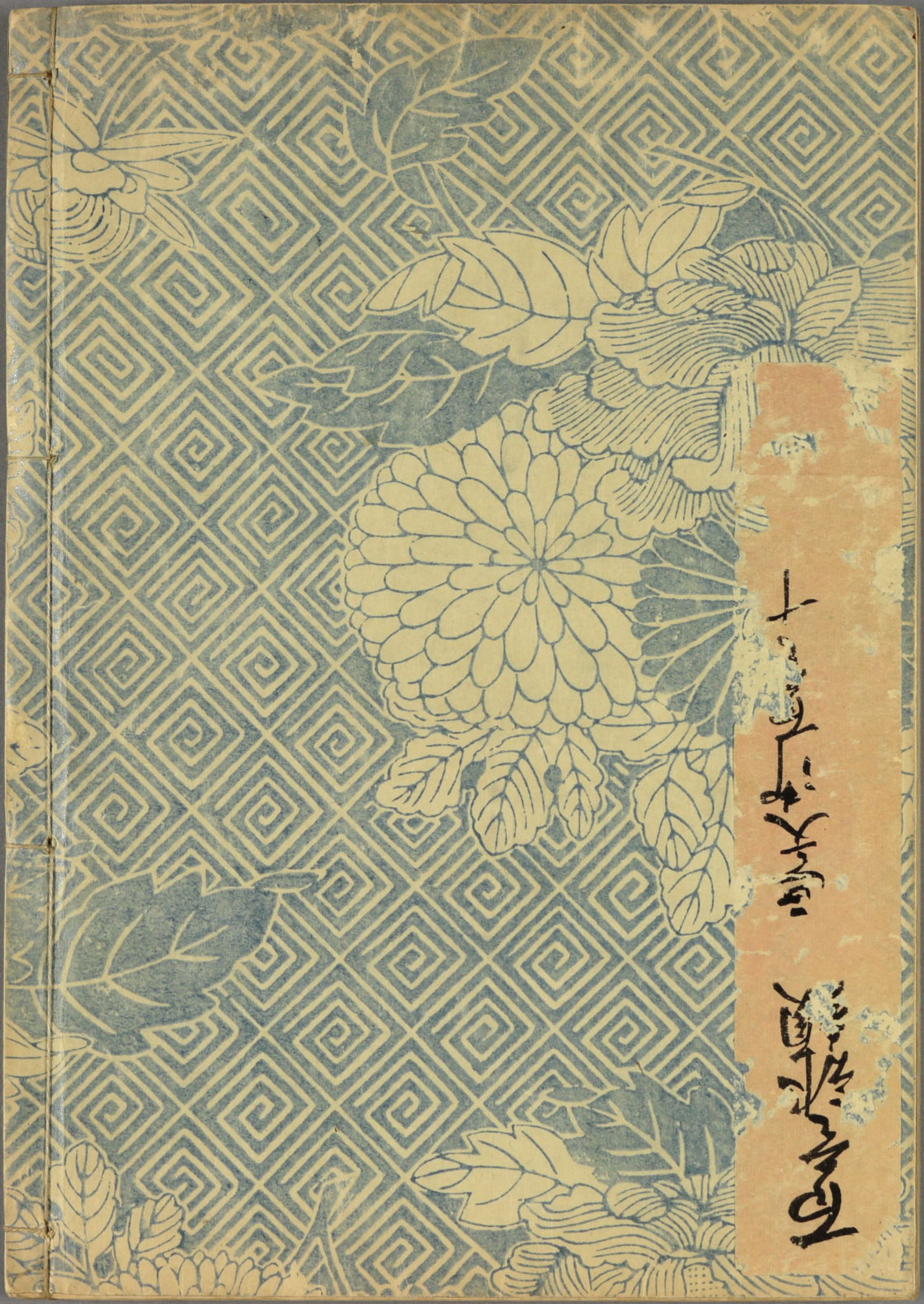
親云

松平の御代よりいりし御垣のうらねの御

三ノ代







十一年十月十日

藤村 著